

なぜ関心を持ったか

- ある新聞で、ドイツの小学校の記事を目にし驚いた。それは次のような内容である。
- ①始業は午前8時の日、9時、10時と3通りあり、2年生の子は毎日昼過ぎには帰る。
 - ②週休二日で、1週間以上の休みが年5回(100日あまり)
 - ③夏休みは1カ月半(もちろん宿題などなし)
 - ④クラス定員は24人で担任が2人
- ドイツといえば先進国であり経済的にも優等生と呼ばれる国である。それはこういう実態なのだから、他の先進国と言われる国々では、教育事情、教師の労働条件などがどのように違うのか調べてみたくなった。

資料を求めて

さて、それでは、どこで何を下に調べればよいのか。組合関係や府庁、府立図書館、新聞社・・・最後に全教の本部に問い合わせ、「教職員権利憲章草案の手引き」というパンフを教えられて読んでみたが、諸外国の学級規模や、編成基準などはわかったが、教師の労働条件や教育内容についてはよくわからなかった。

スペインのある地方の教育事情

近所にスペインのバルセロナに家族で5年程住み、昨年末に帰ってきた人がいるので聞いてみた。

- ①小学校におやつのある時間がある。(1日2回)
- ②長休みは30分。昼休みは2時間半(家に食べに帰ってもいい)
- ③週休2日
- ④夏休みは約2ヶ月半(6月20日頃から9月14日まで)
- ⑤落第制度もある。

3年生 HORARI DE CLASSE
CURS: 3er Educació Primària CICLE MITJA 1.993-94

DILLUNS	DIMARTS	DIMECRES	DIJOUS	DIVENDRES
Gianàstica 9,15-10 算数 9,15-10	Matemàtiques 9-10,30 算数 9-10,30	Castellà 9-10,30 国語 (カタラ語)	Naturalis 9-10,30 理科	Música 9,10-10 音楽 10-10,30
Esbarjo 10,30-11 身体 10,30-11	Esbarjo 10,30-11 身体 10,30-11	Esbarjo 10,30-11 身体 10,30-11	Esbarjo 10,30-11 身体 10,30-11	Esbarjo 10,30-11 身体 10,30-11
Llengua 11-12 (カタラ語)	Llengua 11-12 (カタラ語)	Matemàtiques 11-12 算数	Música 11,10-12 音楽	Anglès 11-12 英語
Socials 12-1 社会	Naturalis 12-1 理科	Reforc llengua 12-1 国語 (カタラ語)	Llengua 12-1 国語 (カタラ語)	Natació 12-1,45 水泳

Reforc Matemàtiques 3,30-4,30 算数 (補修)	Plànica 3,30-5,30 図工	Socials 3,30-5,30 社会	Gianàstica 3,30-4,30 体育	Matemàtiques 3,30-4 算数
Anglès 4,30-5,30 英語			Castellà 4,30-5,30 スペイン語	Castellà 4-5 スペイン語

国 (カタラ語)

オーストラリアの教育事情

「号令のない学校」(佐藤真知子著/学陽書房)という本を教えてもらって読んでみた。この本はオーストラリアに16年間住んでいる日本人女性が、オーストラリアの教育を紹介しながら日本の教育を批判したものである。

- ・オーストラリアの小学校の実態
- ①教科書がない。②時間割がない。③家庭訪問がない。④出席日数や遅刻・早退は問題ではない。
- ⑤低学年のうちにはテストも宿題もない。学校では仲良く遊ぶということを学ぶ。(ゲーム、歌、絵を描く、先生にお話を読んでもらう。)

・学校内外の区別

学校の敷地から一歩でも出たところで起こったことは家庭の問題。

一子どもが万引きをすると家に連絡がある。それを学校側が知ったとしても教師がそれに対する指導を全くしない。親もそれは当然だと思ってる。

・まとめるということをしな

運動会(スポーツデー)学芸会(スクールプロダクション)も参加は自由。

一ある子どもが陸上大会の選手に選ばれた。しかし彼は、当日行くのがいやになり、釣りに行った。翌日、学校へ行っても誰も(教師も)とがめることもしない(全員参加と考えていない。)

・教科によっては出席・欠席が自由

一宗教、性教育、人間関係の授業などは、親が学校に連絡すれば出席しなくてもいい。キャンプ(日本の遠足、林間学校、修学旅行のようなもの)も、全員参加を前提としない。

一80人ぐらいの学年でも40人を募集し(バスの定員で1番安上がりにするため)、先着順に参加させる。

一サイクリングのキャンプなどで、途中教師が脱落することもある。9日後、目的地に着いたが、教師が全員脱落して、生徒だけが三々五々ゴールする。親が目的地で待ち受け、ゴールした子連れ帰る。それでも親は批判しない。

一ある男子校で2週間のキャンプに40名の参加者を募ったが、36名しか集まらなかった。そこで教師は、近くの女子校に声をかけ、すぐの残りの4名が集まり、一緒にキャンプに行った。

5歳から学校で、この1年は、学校になれる準備のようだが、ここでは同じおもちゃや、同じ遊び場に集まらないように教師が指導するとか、ハイスクール(中学と高校を合わせたようなもの6年間)には、カウンセラーを配置している学校が多く、教師と生徒との間に入って、いろんな悩み、問題を解決しているとか・・・。まだまだ、いろんな例をあげるときりがないのだが、こうしてみると、日本の教育とのあまりの違いに大きいカルチャーショックを受けてしまった。

これは、日本より教師の社会的地位(期待度)が相対的に低いのではないかとと思われる節もあるが、また、一口に国民性の問題として片付けてしまえることだろうか。外国のすべてが良いとは言えないけれど、参考にできることはいくつもあるのではないかなと思う。

海外の教育に学びながら、今の日本の現状から出発し、民主主義(民主教育)という立場に立って、よりよい教育を目指して行くべきではないか。話が大きくなって面映ゆいが、いくつかの海外の教育の例を見ながらそう言う風に感じた。